

# 環境報告書2025

Environmental Report



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

# お茶の水女子大学 環境報告書2025

## Contents

1. 学長メッセージ	1
2. 基本方針	2
◆ お茶の水女子大学 環境方針	
◆ THE インパクトランキング	
◆ S D G s への取り組み	
◆ カーボンニュートラルへの取り組み	
◆ 環境報告書の作成方針	
3. 大学概要	5
4. 環境配慮の計画	8
5. 環境マネジメント組織体制	10
6. 環境配慮の取り組み	11
(1) マテリアルフロー	
(2) エネルギー消費原単位	(3) 上水使用量原単位
(4) 紙類購入量	
(5) 資源等の循環的利用 (学内)	
(6) 温室効果ガス	(7) 排水
(8) 化学物質	(9) 有害物質等
(10) 廃棄物	
(11) その他	
7. 環境保全活動の取り組み	19
(1) 大学の取り組み	
(2) 附属学校園の取り組み	
(3) 学生主体の取り組み	
8. 環境教育研究活動の取り組み	21
(1) 大学の取り組み	
(2) 附属学校園の取り組み	
附属幼稚園	
附属小学校	
附属中学校	
附属高等学校	
9. その他	33
(1) 環境に関する規制等の遵守状況	
(2) ステークホルダーへの対応状況	
10. 参考資料	36
(1) 環境負荷指標の算定基準	



今、世界は激しい気候変動、資源の枯渇、環境汚染、人口動態の激変等に加えて新型コロナウイルスの蔓延拡大と様々な課題に直面しています。私たちは、これらの喫緊の地球的課題の解決策を導き出し、世界を持続可能な社会へと発展させていかなければなりません。

お茶の水女子大学は、これらの課題解決のため、研究・イノベーション拠点を構築し、文理を越えた学問分野の融合による先端的研究を推進することにより、課題の解決に努め、「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」の理念である「誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現」を図ってまいります。

お茶の水女子大学は 1875 年、明治 8 年の創立以来、国内外で活躍する女性人材を輩出してきた伝統と実績に基づき、すべての女性が、その年齢・国籍にかかわらず、個々人の尊厳と権利が保障され、自身の学びを深化させ、自己の資質能力の開発に主体的にチャレンジすることを支援していくため、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」ことをミッションとしています。

私たちは、本学のミッションの実現及び未来の地球環境を守る教育・研究推進による人材育成及び社会貢献活動を促進していくとともに、カーボンニュートラルを目指した CO<sub>2</sub> 削減、地域への環境改善貢献等、SDGs に配慮した安全、安心な地球環境に優しいサステナブル・キャンパスの実現に努めてまいります。

また、環境維持保全に関する教育及び日常における取り組みについては、大学のみならず附属学校園においても、持続可能な社会実現のための事業を積極的に実施しています。かつて『成長の限界』という報告書が現代社会に対する警鐘として世界の人びとに大きな衝撃を与えたことがありましたが、その後、環境問題は改善されることなく悪化の一途を辿ってきました。しかし、その結果、次世代の若者たちが堪りかねて声を上げ、この深刻な問題の本質に多くの人びとが気づき、解決に向けて取り組み始めています。これは、人新世 (Anthropocene) の実態を探り、SDGs をいかに政策として実践するのかということだと言えるかもしれません。いずれにしても、本学は、附属学校園と大学が一体となってエビデンスに基づく科学的な対策の検討を通じて、持続可能な人類の発展に向けて環境問題をはじめとする現代社会の様々な課題に取り組んでまいり所存です。

本報告書は、このような地球環境保全事業の中で、本学の環境に関する取り組みを問い直し、取りまとめたものです。是非、ご一読いただき、本学の環境改善活動についてご理解いただければ幸いです。

国立大学法人お茶の水女子大学長

佐々木 泰子 *Yamoko Suzuki*



国登録有形文化財の大学正門



## お茶の水女子大学 環境方針

### I. 基本理念

お茶の水女子大学は、様々な環境課題に対して、私たちが地球規模で連帯して解決に取り組まなければならない喫緊の課題であることを深く認識し、地球環境に配慮した安全・安心なキャンパスの構築に努め、持続可能な社会の実現へ向けて社会的役割を果たします。また、日々の教育研究活動をはじめとするあらゆる諸活動を通して、現代社会が直面する環境課題を意識し解決する能力を備えた人材の育成に努め、豊かな未来の創造に貢献します。

### II. 基本方針

お茶の水女子大学は、基本理念に基づき、以下の5つの基本方針のもと、環境配慮の取り組みを進めます。

省エネルギーの推進

資源の有効活用

有害物質の漏出防止

環境活動の推進と環境人材の育成

社会への説明責任と情報発信

#### 1. 省エネルギーの推進

「お茶の水女子大学エネルギー管理標準」に基づき、キャンパス内の省エネルギーを推進するとともに、全ての構成員への省エネルギーに関する啓発活動を行い、カーボンニュートラルに向けた取り組みに貢献します。

#### 2. 資源の有効活用

キャンパス内で消費する環境資源を削減及び有効活用し、キャンパス外へ排出する廃棄物の削減に努め、エコキャンパスを目指します。

#### 3. 有害物質の漏出防止

環境関連の法令を遵守するとともに、全ての化学物質等について適正に管理し、有害物質の漏出防止・汚染防止を徹底します。

#### 4. 環境活動の推進と環境人材の育成

多様な環境保全活動、環境教育・研究活動、社会貢献活動を通じて、環境課題について自ら考え、環境課題の解決へ向けて積極的に取り組む環境マインドを持った人材の育成に努めます。

#### 5. 社会への説明責任と情報発信

本学の環境に対する考え方や環境配慮の取り組み・成果について、学内外へ広く情報を発信し、地域社会や国際社会との架け橋としての役割となることを目指します。

(2021年9月 制定)



## SDGsへの取り組み

お茶の水女子大学 HP<SDGs への取り組み> <https://www.ocha.ac.jp/program/menu/sdgs/top.html>

2015年の国連サミットで採択されたSDGs(Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標)は、「多様性を包摂する社会(inclusive society)」と、「地球上の誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを理念とし、全世界が直面する課題に対して、2030年に向けてあらゆる国々、企業、機関等で取り組むユニバーサルな達成目標です。17のゴール・169のターゲットから構成されるこの目標に、本学でも、様々な観点から積極的に取り組んでおり、2022年度には、「SDGs推進研究所」を開設し、さらなる貢献度向上を目指します。



本報告書では、本学の環境課題への各取り組みについて、関連するSDGsの目標をアイコンで示しています。

## THE インパクトランキング

イギリスの高等教育関連情報誌 Times Higher Education が世界の大学が社会課題にどう取り組んでいるかを国連のSDGs(持続可能な開発目標)の枠組みを使って見える化したもので、2019年から開始されました。17のSDGsゴールから4つ以上を選択し(「SDG17 パートナーシップで目標を実現しよう」は選択必須)、SDGsに関連する指標やエビデンスを入力するものです。お茶の水女子大学は3年連続、SDGs Goal5 Gender Equality(目標5 ジェンダー平等を実現しよう)で国内1位を獲得しました。

## カーボンニュートラルへの取り組み

2021年7月に設立された「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」は、大学等間の連携を通じて、脱炭素化に係る大学等の貢献の在り方や方向性を議論するとともに、研究開発や成果の社会実装の推進、国内外への発信力の強化等を行うことを目的としており、本学を含め180以上の国公私立大学等の機関が参加しています。本学は、5つのワーキンググループのうち、「ゼロカーボン・キャンパスWG」に所属しており、地域社会においてカーボンニュートラルの取り組みを主導する立場として、率先して大学キャンパスのゼロカーボン化に係る取り組みを推進していきます。2024年度は、計3回のワーキングが開催され、カーボンニュートラルに係る他大学等の取り組み・成果の情報共有や意見交換が行われました。

また、本学では、ゼロカーボン・キャンパスの達成に向けて、以下のような取り組みを実施しています。

### ●カーボンニュートラル対策工事

キャンパス内の省エネルギー対策として、照明器具のLED化や空調設備の高効率化等の工事計画を策定し、2022年度より計画的に進めています。

### ●再生可能エネルギー100%の電力調達

2022年度からの大塚1団地の電力調達について、供給電力の100%を再生可能エネルギー由来の供給電力とする契約を締結しています。

### ●温室効果ガス排出量削減の取組計画について

2025年6月を目標に「お茶の水女子大学カーボンニュートラルプラン」を策定する予定です。カーボンニュートラルプランでは、省エネルギー化や再生可能エネルギーの導入、排熱や自然エネルギーの活用などによる二酸化炭素排出の削減を優先し、残余の排出については信頼性の高い除去・相殺手法で賄うカーボンニュートラルを目標とします。これを踏まえ、将来的には温室効果ガス全体の排出実質ゼロ(ネットゼロ)を目指し、地球温暖化対策を積極的に取り入れた施設整備を推進します。

## 環境報告書の作成方針

### ■ 趣旨

本学では、2021年度より環境報告書を作成・公表しており、本学の環境に対する考え方、取り組み、成果等を、ステークホルダーである児童、生徒、学生、卒業生、入学希望者、保護者、教職員、地域住民、企業、自治体等に向けて広く情報発信し、様々な環境課題に対する本学が目指す方向性を明確にすることで、本学と社会とをつなぐコミュニケーションツールとして活用しています。

### ■ 報告対象範囲

お茶の水女子大学 大塚1団地、大塚2団地、東村山団地、館山団地

※板橋団地は2022年度より本報告書の対象外(土地を民間に貸し付けており、本学が所有する施設がないため)

### ■ 報告対象期間

2024年度(2024年4月～2025年3月)

### ■ 参考としたガイドライン

環境省「環境報告ガイドライン(2018年版)」

環境省「環境報告書の記載事項等の手引き(第3版)」

## お茶の水女子大学 キャンパス概要

本学のキャンパスは大塚1団地(東京都文京区)を主要キャンパスとし、その他のキャンパスとして、学生宿舎のある大塚2団地(東京都文京区)、板橋団地(東京都板橋区)、郊外園のある東村山団地(東京都東村山市)、湾岸生物教育研究所と野外教育施設のある館山団地(千葉県館山市)の計5団地で構成されています。なお、板橋団地は、土地を民間に貸し付けており本学の施設はありません(2024年5月1日現在)。これら5団地の土地面積の合計は136,114㎡、建物保有面積の合計は103,070㎡ですが、主要キャンパスである大塚1団地の土地面積が約113,741㎡(全体の約84%)、建物保有面積が99,179㎡(全体の約96%)と、大学全体の大部分を大塚1団地が占めています。



番号	団地名	所在地	主要施設	敷地/建物延面積(㎡)
1	大塚1	東京都文京区大塚2-1-1	大学校舎・附属図書館 学生支援施設・附属学校校舎他	113,741 / 99,179
2	大塚2	東京都文京区大塚1-6-6	小石川寮・お茶大SCC(学生寮) ユビキタスコンピューティング実験住宅	2,553 / 2,784
3	板橋	東京都板橋区仲町2-1	なし(土地を民間に貸付)	8,029 / -
4	東村山	東京都東村山市萩山町2-3-1他	郊外園(農場)	3,168 / -
5	館山	千葉県館山市香11	湾岸生物教育研究所 館山野外教育施設	8,623 / 1,107

※面積は2024年5月1日現在

## 大塚1団地(大塚キャンパス)の概要

### 敷地現況

大塚1団地は、国道254号線(春日通り)、区道、民家などに囲まれ、大学、高校、中学校などの文教施設とマンション・住宅が混在した地域に位置しています。敷地北東側の国道に面して正門があり、正門から向かって正面に大学本館があります。敷地の南側には区道を挟んで私立大学、他の国立大学の附属学校、公立中学校があり、その他の部分は戸建て住宅やマンションと隣接した敷地となっています。



### 教育環境

お茶の水女子大学は、2023年度現在は、文教育学部・理学部・生活科学部の3学部体制ですが、2024年度からは新たに共創工学部を加えた4学部をもつ女子総合大学となりました。大塚1団地は全学部と大学院、各研究センター、附属図書館等、あらゆる大学機能が集結した環境となっています。また、敷地内には附属幼稚園、小学校、中学校、高等学校が設置され、文京区立お茶の水女子大学こども園、いずみナーサリー(保育施設)も合わせた附属学校園と大学・大学院との連携を通じた一貫した教育理念に基づくキャンパス環境が整備されています。

### 自然環境

キャンパス内には、多くの樹木が植栽され、大学のみならず、東京都心の中の貴重な緑になっており、皇淳皇后陛下御下賜の楓をはじめ、寄贈樹木、記念樹木及び希少植物も存在します。また、東京都文京区みどりの保護条例において、一定規模以上の建築計画の際には緑化面積の基準を満たすよう求められており、構内の緑化保全に当たっては、これらのことを考慮しながら、緑地の維持保全に努めています。

## 建物面積・構成員数

### ■ 大学・大学院

建築面積	18,801 m <sup>2</sup>
延床面積	64,866 m <sup>2</sup>
構成員	
学部学生	2,060 人
(文教育学部)	919 人
(理学部)	554 人
(生活科学部)	534 人
(共創工学部)	53 人
大学院学生	816 人
外国人留学生	31 人
研究生等	87 人
教職員	370 人
計	3,364

### ■ 附属学校園

建築面積	10,380 m <sup>2</sup>
延床面積	21,353 m <sup>2</sup>
構成員	
高校生	363 人
中学生	335 人
小学生	628 人
幼稚園児	157 人
保育園児	10 人
こども園児	93 人
教職員	116 人
計	1,702

※面積、構成員数は2024年5月1日現在

## CAMPUS MAP

### 施設一覧

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1 大学本館                 | 19 保健管理センター            |
| 2 大学講堂(観音堂)            | 20 弓道場                 |
| 3 総合研究棟                | 21 文教育学部2号館            |
| 4 生活科学部本館2             | 22 Student Commons     |
| 5 お茶大アカデミック・プロダクション研究棟 | 23 課外活動団体談話室           |
| 6 屋外エレベーター棟            | 24 人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟 |
| 7 ラジオアイソトープ実験センター      | 25 茶室(芳香庵)             |
| 8 理学部1号館               | 26 大学体育館               |
| 9 理学部2号館               | 27 附属幼稚園               |
| 10 理学部3号館              | 28 附属小学校               |
| 11 情報基盤センター棟           | 29 附属中学校               |
| 12 附属図書館               | 30 附属高等学校              |
| 13 学生センター棟             | 31 国際交流留学生プラザ          |
| 14 文教育学部1号館            | 32 いずみナーサリー            |
| 15 共通講義棟1号館            | 33 大塚宿舎                |
| 16 共通講義棟2号館            | 34 こども園                |
| 17 共通講義棟3号館            |                        |
| 18 大学食堂(NSSOL Kitchen) |                        |



※CAMPUS MAPは2024年5月1日現在

## キャンパスの環境整備方針

キャンパスマスタープラン2021では、SDGsに配慮した安全・安心な魅力あるキャンパスづくりのため、基本方針の1つとして、「地球環境に配慮した教育研究環境の実現」を掲げています。この基本方針のもと、持続可能なキャンパス環境を実現するため、緑ある自然環境を維持し、省エネルギーに配慮した一体的な地球環境対策を推進しています。

キャンパスマスタープラン2021に基づく具体的な整備方針は以下のとおりです。

1. キャンパス内の樹木の保存・継承、及び現存する自然環境の教育への活用による維持・保全を推進します。
2. 老朽化し機能低下した施設設備を改善し、長期にわたり施設を有効に活用するための機能(老朽)改善整備を行います。
3. 地球温暖化対策(省エネ・温暖化防止等)を積極的に取り入れた施設整備となるよう計画を立案します。
4. 関係法令に則り地球温暖化対策を推進し、温室効果ガス排出量の削減に努めつつ、サステイナブル・キャンパスとして環境に配慮した施設整備を進めます。



お茶の水女子大学 HP<CMP2021 掲載ページ> [https://www.ocha.ac.jp/limited/introduction\\_d/fil/CMP2023ver20230602.pdf](https://www.ocha.ac.jp/limited/introduction_d/fil/CMP2023ver20230602.pdf)

## 大塚2団地の概要

### 敷地現況

大塚2団地は、大塚1団地から徒歩3分の場所にあり、私立大学などの教育施設が集まった文教地区と住宅街の境界に位置しています。敷地の北側、東側は跡見学園と貞静学園に接し、前面道路を挟んで西側は拓殖大学、南側は閑静な住宅街となっています。

### 教育環境

大塚2団地には、小石川寮、お茶大SCCの2つの学生寮が整備され、その隣の敷地に実験施設であるユビキタス実験住宅が配置されています。小石川寮は、大学院生を対象とした学生寮であり、入居学生の自治により運営されています。お茶大SCCは、学部1～2年生を対象とした学生寮であり、「ともに住まい、ともに成長する空間」をコンセプトに、5人の小さなコミュニティを1ハウスとする、緩やかな共生のためのハウス制としています。寮生の交流の場であるラウンジ、談話室を充実させ、人と人とのつながりを大切にする新しいタイプの寮となっています。

### 建物面積・寮生数

	小石川寮	お茶大SCC
建築面積	481 m <sup>2</sup>	459 m <sup>2</sup>
延べ床面積	1,417 m <sup>2</sup>	1,261 m <sup>2</sup>
寮生定員	77人	50人

## 東村山団地の概要

### 敷地現況

東村山団地は、西武多摩湖線・西武拝島線萩山駅から徒歩4分と最寄り駅から近く、交通便の良い閑静な住宅街に囲まれています。東京都の公園とマンションを挟み、東側と西側に分かれていましたが、西側の敷地は2021年度末を以て廃止となりましたが、東村山市によって萩山公園へと整備される予定です。

### 教育環境

東村山団地は、附属学校園の園児、児童及び生徒を対象とした学習体験農場(東村山郊外園)として整備されています。毎年、さつまいもや大根、ジャガイモなどの野菜を育てて食べる教育活動の一環として活用されています。

## 館山団地の概要

### 敷地現況

館山団地は、房総半島先端の館山市内にあり、敷地の北西側は東京湾の海岸に面し、南東側は民地(畑)に接しています。

### 教育環境

館山団地には、理学部の附属臨海実験所である湾岸生物教育研究センター(実験棟・宿泊棟)と、宿泊可能な課外活動施設である館山野外教育施設と、職員宿舎等が整備されています。湾岸生物教育研究所は、海岸沿いに実験実習施設及び宿泊施設が設置され、海洋生物に関する様々な実習や研究が行われており、卒業研究や大学院での研究にも使われています。

※各団地の概要は2024年5月1日現在



# 4

## 環境配慮の計画

本学では、「省エネルギーの推進」、「資源の有効活用」、「有害物質の漏出防止」、「環境活動の推進と環境人材の育成」、「社会への説明責任と情報発信」の5つの基本方針に基づき、年度毎に取り組み計画を策定し、環境配慮の取り組みを推進しています。

以下に、2024年度の取り組み計画と、取り組み計画に対する自己評価を示します。

### 1. 省エネルギーの推進

課 題	取 り 組 み 計 画	評 価	参 照 頁
エネルギー使用量の削減 /温室効果ガス排出量の削減 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■大学全体でエネルギー消費原単位を毎年1%以上削減することを目標とします。</li> <li>■省エネチェックシートに基づき、省エネ対策を実施します。</li> <li>■地球温暖化対策として、LED 照明への取替、老朽化した空調設備の更新を計画的に行います。</li> <li>■新たに設置する機器は、省エネ型又は高効率型の機器を採用します。</li> </ul>	○	P.12 P.14
省エネルギーの啓発 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■月毎の光熱水使用量をホームページに公表し、エネルギーの「見える化」を行います。</li> <li>■各種省エネに関する掲示物を掲示し、学生・教職員への省エネルギーの啓発を行います。</li> </ul>	○	P.12

### 2. 資源の有効活用

課 題	取 り 組 み 計 画	評 価	参 照 頁
上水使用量の削減 /排水量の削減 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■トイレ改修時に、節水器具や擬音装置の導入を推進します。</li> <li>■建物毎の上水使用量の推移を把握し、速やかな漏水の発見に努めます。</li> <li>■雨水貯留施設・浸透施設の設置を推進します。</li> </ul>	○	P.13
紙類使用量の削減 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■電子ファイルを用いた会議資料のペーパーレス化を推進します。</li> </ul>	○	P.13
廃棄物排出量の削減 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■学内において資源の再利用・有効活用を推進します。</li> <li>■分別回収を徹底し、資源のリサイクルを推進します。</li> </ul>	○	P.14 P.17

### 3. 有害物質の漏出防止

課 題	取 り 組 み 計 画	評 価	参 照 頁
化学物質の漏出防止 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■薬品管理マニュアルに基づき、適正に薬品の管理・廃棄を行います。</li> <li>■大学院生、教員に対して、薬品管理ソフト使用講習会を行います。</li> <li>■学部学生に対して、各実験の前に教員より薬品の取り扱いについて説明を行います。</li> </ul>	○	P.16
有害物質の漏出防止 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■アスベスト含有建材を適正に撤去・廃棄します。</li> </ul>	○	P.16

### 4. 環境活動の推進と環境人材の育成

課 題	取 り 組 み 計 画	評 価	参 照 頁
環境保全活動の推進 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ゴミの分別の徹底、定期的な清掃や樹木の剪定等を行い、キャンパス内の環境美化に努めます。</li> <li>■学生主体による環境活動を推奨します。</li> </ul>	○	P.19 ～P.21
環境教育研究活動 の推進 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■環境教育を通して、児童・生徒・学生が環境問題への関心を持つきっかけを与えます。</li> </ul>	○	P.22 ～P.34

### 5. 社会への説明責任と情報発信

課 題	取 り 組 み 計 画	評 価	参 照 頁
学内外への情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> <li>■環境に対する考え方、方針を学内外へ公表します。</li> <li>■取り組み実績について自己評価を実施し、学内外へ公表します。</li> </ul>	○	P.1 ～P.10

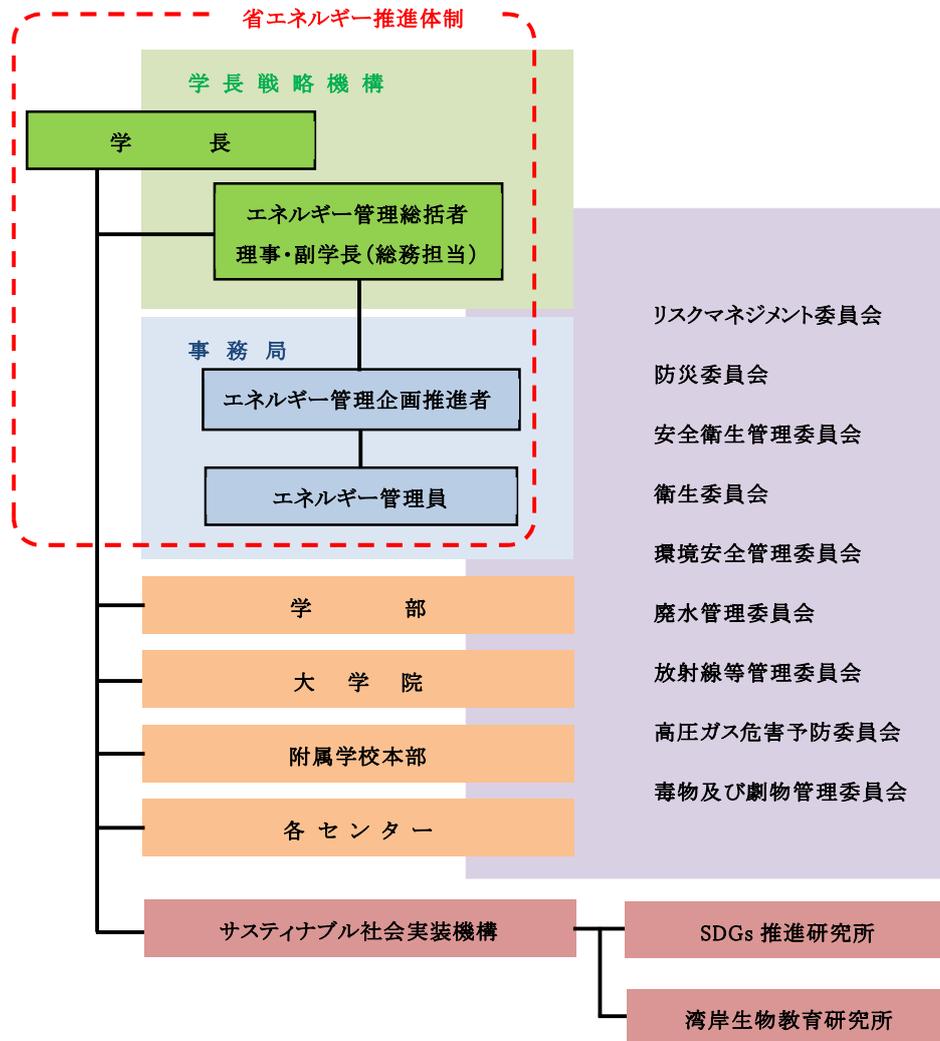
【評価】 ○ 目標を達成した    △ 未達成であるが良好な改善傾向にある    × 取り組みが不十分である

# 5

## 環境マネジメント組織体制

本学では、環境配慮に向けた取り組み計画を確実に実施するために、学長のもと、下図のような環境マネジメント組織体制を構築し、運用しています。各委員会は、学内の環境に関する様々な課題に対して、組織横断的に検討及び実行する役割を担っています。各委員会には、大学の各学部・大学院及び各附属学校園の担当教員、事務職員が委員として選任されており、オールお茶の水体制で環境課題へ取り組んでいます。

2022年度からは、新たにサステイナブル社会実装機構のもと、SDGs推進研究所と湾岸生物教育研究所を発足しました。



### サステイナブル社会実装機構

持続可能な社会の創成には、社会全体でSDGs達成を推進することが必要です。そのための人材養成を目的に本機構を新設し、SDGs教育・研究プログラムを企画・実行していきます。喫緊の社会課題解決のための研究・イノベーション拠点を構築し、文理を超えた先端研究の推進により、SDGsの理念である「誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現」を目指します。

### SDGs推進研究所

本学の特色である生活科学・生活環境科学・ジェンダー・食育などをテーマとする研究者で組織され、持続可能な社会への貢献を目指した研究を推進します。また、附属学校園が同一キャンパスにあることを活かした幼少期からのSDGs一貫教育プログラムの開発のほか、企業や自治体等との共同研究やインターンシップなどを通じた活動支援を目指します。

### 湾岸生物教育研究所

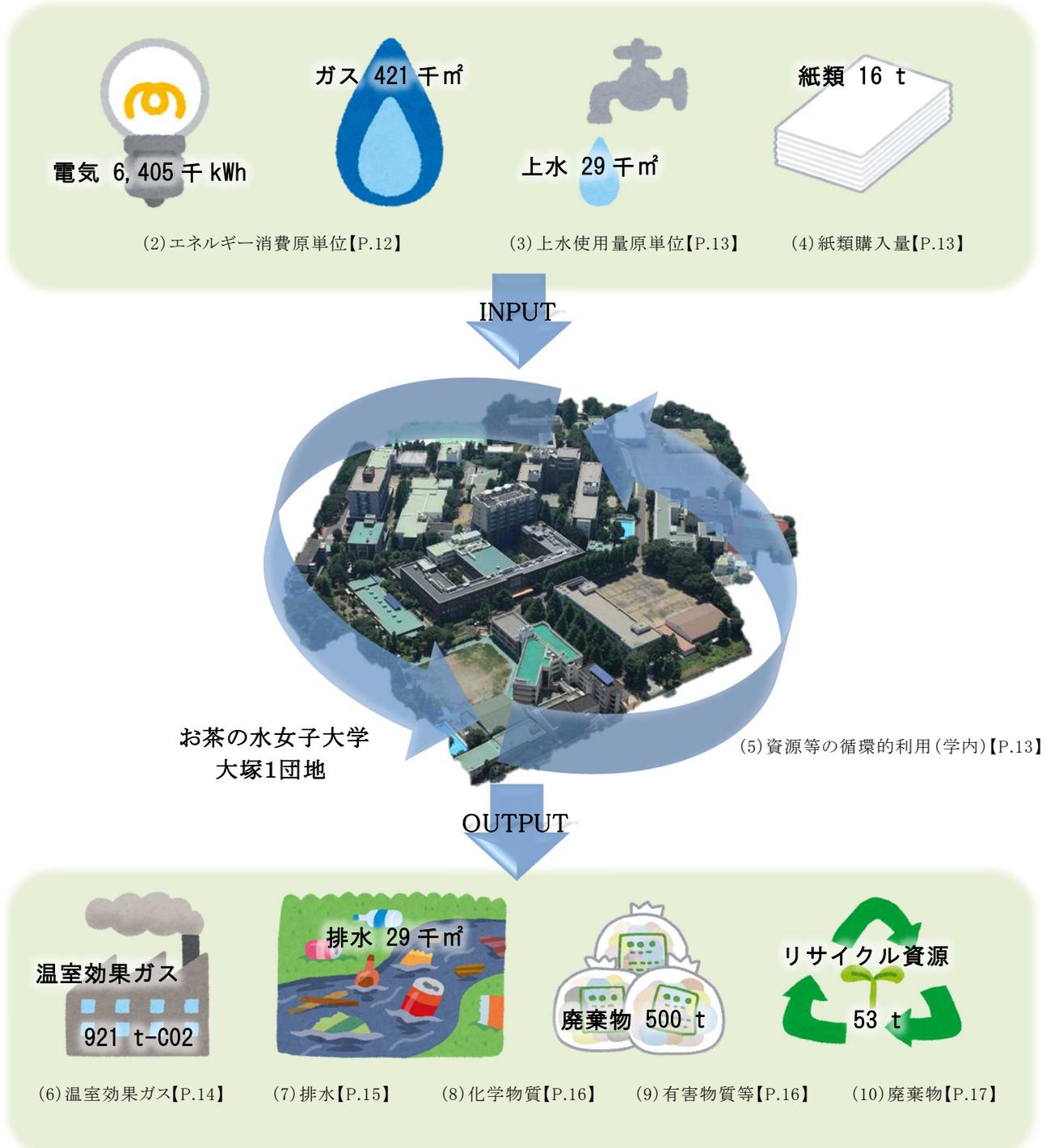
湾岸域の生物と環境に関する研究と教育を推進し、フィールド・フロントエンドでの教育活動を通して、社会の自然科学や環境に対する理解を深めることを目的とします。SDGs14「海の豊かさを守ろう」を啓発するための活動にも取り組み、潮間帯から深海までの幅広い環境に生息する動植物の発生、進化、生態、保全にかかわる研究を推進していきます。

## (1) マテリアルフロー



マテリアルフローとは、一定の期間内に投入される資源の総量、地域内での資源の流れ、地域外へ排出される資源の総量を集計したものです。循環型社会を構築するためには、私たちがどれだけ資源を採取、消費、廃棄しているかというマテリアルフローを知ることが第一歩となります。

大塚1団地(大塚キャンパス)の2024年度におけるマテリアルフローの概要を以下に示します。



## (2) エネルギー消費原単位



### エネルギー使用量の削減

本学は、2004年度に「お茶の水女子大学エネルギー管理標準」を制定し、省エネルギー推進体制のもと、エネルギー管理を適切に実行し、キャンパスの省エネルギーを推進してきました。「お茶の水女子大学エネルギー管理標準」では、「エネルギーの使用の合理化等に関する法律(省エネ法)」に基づき、年度計画として、『エネルギー消費原単位を前年度と比較して1%以上低減する』ことを目標設定としています。(※エネルギー消費原単位は、建物の床面積あたりのエネルギー消費量を示す。)

2024年度の大塚1団地のエネルギー消費原単位は、前年度(2023年度)より約2.1%減少しました。省エネルギー活動への取り組みや老朽化した設備の取替工事等による効果が現れ、減少したと考えられます。



※エネルギー消費原単位の算定基準は、「10.参考資料」による。

### 【エネルギー使用量の削減の取り組み(2024年度)】

- 「お茶の水女子大学エネルギー管理標準」における省エネチェックシートに基づき、省エネルギー対策を実施しました。(以下に具体例を示します。)
  - ・講義室の空調設備に自動停止タイマーを設定し、消し忘れ防止対策を行いました。
  - ・トイレの暖房便座や給湯室の電気温水器について、夏期における使用を停止しました。
  - ・ブラインドやカーテンで日射を調整することにより、照明設備や空調設備の使用を抑制しました。
  - ・昼休みは、事務室等(室内)全ての照明を消灯しました。
  - ・昼間(晴天時)は、窓際の照明を消灯しました。
- 各建物において、老朽化した空調設備を高効率型の空調設備への取替工事、LED照明器具への取替工事を実施しました。

### 省エネルギーの啓発

省エネルギーを実現するためには、施設面の改善による省エネルギーの取り組みだけでは不十分であり、施設の利用者である学生や教職員一人ひとりの省エネルギーに対する意識を高めることが重要となります。本学では、省エネルギー推進体制のもと、学生や教職員への省エネルギーの啓発に取り組んでいます。

### 【省エネルギーの啓発に関する取り組み(2024年度)】

- 月毎の電気・ガス・水道使用量について、前年との比較をグラフ化し、ホームページで毎月公表しました。また、電力使用状況をホームページでリアルタイムに公表し、エネルギーの「見える化」を実施しています。

お茶の水女子大学 HP <電力使用状況>

[https://www.ocha.ac.jp/save\\_energy/index.html](https://www.ocha.ac.jp/save_energy/index.html)



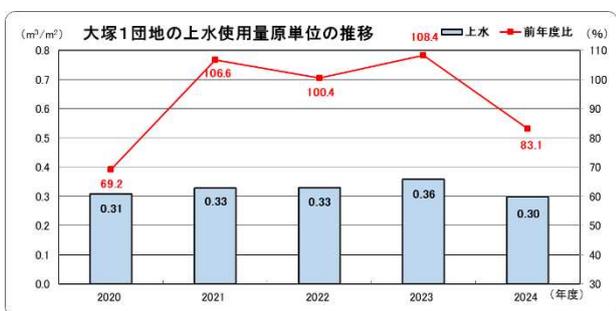
- 空調設備によるエネルギー使用量の多い夏季において、省エネルギーの一層の推進に資するため、すべての構成員に夏季一斉休業(8/11~19)の協力を依頼しました。
- 以下のような掲示物等により省エネルギーの啓発を実施しました。
  - ・夏季における軽装(クールビズ)を励行しました。
  - ・「2 アップ 3 ダウン運動」について、各エレベーター乗り場に掲示しています。
  - ・照明スイッチや水道の蛇口に「節電シール」や「節水シール」を貼付しています。



### (3) 上水使用量原単位

本学では、月毎の上水使用量をホームページで公表することにより、学生や教職員への節水の啓発を実施しています。また、トイレの改修時には、洗浄水量を抑えた節水型の衛生器具の採用を進めています。このような水資源の保護の取り組みは、水やお湯を利用するために不可欠なエネルギーの消費をセーブし、地球温暖化の原因となるCO<sub>2</sub>の排出を軽減することにつながり、環境保全にも役立ちます。

2024年度の大塚1団地の上水使用量原単位については、前年度(2023年度)と比べて約17%減少しました。引き続き、省エネルギー活動への取り組みを行う必要があります。(※上水使用量原単位は、建物の床面積あたりの上水使用量を示す。)



#### 【上水使用量/排水量の削減の取り組み】

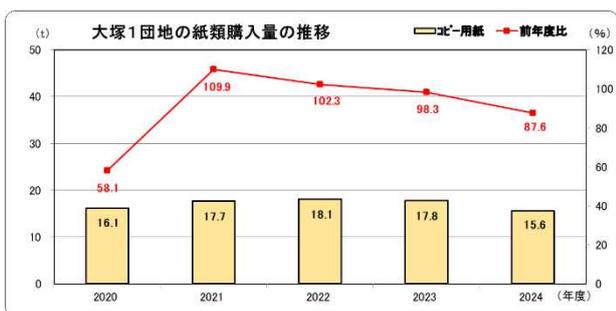
- 週毎に各建物の水道メーターを検針し、建物毎の上水使用量の推移を把握することで、漏水の速やかな発見に努めています。2024年度は、各建物において、大きな漏水事故の発生はありませんでした。
- 理学部1号館(西側)の改修時に、雨水浸透管・雨水浸透枳を新設し、公共下水道への排水量を削減しています。これにより、下水処理施設で処理する排水量が減少するため、下水処理施設でのエネルギー使用量が減少し、温室効果ガス排出量の削減につながります。
- 新学生宿舎(音羽館)の整備時に、雨水浸透管・雨水浸透枳を新設し、公共下水道局への排水量を削減しています。また、屋外に雨水貯留タンクを設置し、雨水を散水用水として使用しています。



【雨水貯留タンク】 【雨水浸透管・雨水浸透枍】

### (4) 紙類購入量

本学では、「国立大学法人お茶の水女子大学がその事務及び事業に関し温室効果ガスの排出の削減等のため実行すべき措置について定める計画」において、温室効果ガスの排出量削減の取り組みの1つとして、「用紙類の使用量の削減」を掲げています。2024年度の紙類購入量は、前年度(2023年度)と比べて約12%減少しました。2020年度は、コロナ禍におけるリモート会議やオンライン授業の実施により、資料の電子ファイル化が促進されましたが、その傾向が現在も続いていると考えられます。



#### 【紙類購入量の削減の取り組み(2024年度)】

- 以下のような取り組みを実施することにより、紙類の購入量を削減しました。
  - 各種会議における資料をPDFファイルとし、タブレット端末などにおいて閲覧することで、会議資料のペーパーレス化を推進しました。
  - 電子掲示板の活用により、紙媒体による資料配付を削減しました。



【電子掲示板】



## (5) 資源等の循環的利用(学内)



本学は、廃棄物の排出量を削減するため、以下のような取り組みを実施することにより、学内において資源の再利用・有効活用に努めています。

- ・ 各部署で不要となった什器(机、椅子、ロッカーなど)を学内の共通保管庫にて保管し、什器が必要な他部署において有効活用を行っています。
- ・ 学内グループウェアにおいて、不要品(パソコン、プリンターなど)の譲渡等を掲示板に掲載することで、不要品の有効活用を行っています。
- ・ 工事において撤去した機器で「再利用可能な機器」を保管し、別工事で再利用しています。
- ・ 附属図書館において「お持ち帰りコーナー」を設置し、不要となった資料を附属図書館の利用者へ提供しています。対象となる資料は、重複して図書館で所蔵している図書、内容的に古くなっているなどの理由で廃棄が決定した図書、保存期間を過ぎた雑誌、出版社や著者などから寄贈された資料のうち受け入れの対象とならなかった図書等です。



【再利用可能な機器の保管】



【お持ち帰りコーナー】

## (6) 温室効果ガス



### CO<sub>2</sub> 排出量の削減

本学では、第4期中期目標・中期計画において、『『キャンパスマスタープラン 2021』に基づき、カーボンニュートラルを目指したCO<sub>2</sub>削減を積極的に推進すること』を掲げています。2024年度の大塚1団地のCO<sub>2</sub>排出量は、前年度(2023年度)より約6%増加しました。2022年度に従来の電気事業者から、CO<sub>2</sub>排出量の少ない電気事業者へ契約を変更し、以前と比べると大幅に減少しています。



※CO<sub>2</sub> 排出量の算定基準は、「10.参考資料」による。

### 【CO<sub>2</sub> 排出量の削減の取り組み(2024年度)】

- 照明器具について、蛍光灯型から LED 型への取替工事を実施しました。(大学本館講堂)
- 空調設備について、老朽化した機器からトップランナー機器への取替工事を実施しました。(総合研究棟・大学本館講堂)
- 給湯設備について、老朽化した機器を高効率型の機器へ取替工事を実施しました。(大学本館・総合研究棟)

### フロン類の漏洩防止

空調設備機器等の冷媒として使用されるフロン類は温室効果が高く、機器からのフロン類の漏洩は地球温暖化に多大な影響を与えます。本学では、「フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律(フロン排出抑制法)」に基づいて、フロン類充填機器を適正に管理することでフロン類の漏洩防止に努めています。2024年度のフロン類算定漏洩量は52t-CO<sub>2</sub>でした。

## (7) 排水



大塚キャンパスの主要な排水系統は、公共下水道への放流先ごとに東門系統・西門系統・南門系統に区分されており、各系統の末端において、定期的に排水の水質検査を実施しています。2024年度は、いずれの系統でも東京都23区内下水排除基準値を超過した物質はありませんでした。

【排水水質分析結果(2024年10月9日採水)】

項目	基準値	分析結果(東門)	分析結果(西門)	分析結果(南門)
カドミウム	0.03mg/L 以下	0.003 未満	0.003 未満	0.003 未満
シアン	1mg/L 以下	0.1 未満	0.1 未満	0.1 未満
有機燐	1mg/L 以下	0.1 未満	0.1 未満	0.1 未満
鉛	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
六価クロム	0.5mg/L 以下	0.05 未満	0.05 未満	0.05 未満
砒素	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
総水銀	0.005mg/L 以下	0.0005 未満	0.0005 未満	0.0005 未満
アルキル水銀	検出されないこと	不検出	不検出	不検出
トリクロロエチレン	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
テトラクロロエチレン	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
ジクロロメタン	0.2mg/L 以下	0.02 未満	0.02 未満	0.02 未満
四塩化炭素	0.02mg/L 以下	0.002 未満	0.002 未満	0.002 未満
1,2-ジクロロエタン	0.04mg/L 以下	0.004 未満	0.004 未満	0.004 未満
1,1-ジクロロエチレン	1mg/L 以下	0.02 未満	0.02 未満	0.02 未満
シス-1,2-ジクロロエチレン	0.4mg/L 以下	0.04 未満	0.04 未満	0.04 未満
1,1,1-トリクロロエタン	3mg/L 以下	0.3 未満	0.3 未満	0.3 未満
1,1,2-トリクロロエタン	0.06mg/L 以下	0.006 未満	0.006 未満	0.006 未満
1,3-ジクロロプロペン	0.02mg/L 以下	0.002 未満	0.002 未満	0.002 未満
ベンゼン	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
セレン	0.1mg/L 以下	0.01 未満	0.01 未満	0.01 未満
ほう素	10mg/L 以下	0.1 未満	0.1 未満	0.1 未満
ふっ素	8mg/L 以下	0.5 未満	0.5 未満	0.5 未満
1,4-ジオキサン	0.5mg/L 以下	0.05 未満	0.05 未満	0.05 未満
総クロム	2mg/L 以下	0.2 未満	0.2 未満	0.2 未満
銅	3mg/L 以下	0.05	0.05	0.09
亜鉛	2mg/L 以下	0.2 未満	0.2 未満	0.2 未満
フェノール類	5mg/L 以下	0.5 未満	0.5 未満	0.5 未満
鉄(溶解性)	10mg/L 以下	0.05 未満	0.05	0.05 未満
マンガン(溶解性)	10mg/L 以下	0.05 未満	0.05 未満	0.05 未満
生物化学的酸素要求量(BOD)	600mg/L 未満	170	52	89
浮遊物質(SS)	600mg/L 未満	69	49	65
ノルマルヘキサン抽出物質	30mg/L 以下	9	1	6
窒素	120mg/L 未満	80	110	130
磷	16mg/L 未満	4.7	5.4	7.5
水素イオン濃度(pH)	5を超え9 未満	7.2	7.8	7.7

## (8) 化学物質



本学では、「国立大学法人お茶の水女子大学薬品管理マニュアル」に基づき、すべての化学薬品について購入（譲渡）から廃棄までを、関東化学（株）、東北緑化環境保全（株）製の薬品管理支援システム IASO R6 で適切に管理しています。

年に1度開催する、「薬品管理支援システム IASO 講習会」では、システムの利用方法や関係各規則・法令（消防法、労働安全衛生法、化管法（PRTR 制度、MSDS 制度）等）、バーコードラベルの添付や薬品廃棄の方法のような化学薬品の実際の取扱などについて説明しています。このマニュアルは大学 HP からいつでも最新版をダウンロードできるようにしています。



## (9) 有害物質等



### アスベスト

本学では、建物の改修工事や解体工事に合わせてアスベスト含有建材の有無を調査し、アスベスト含有建材が有る場合は、関係法令に基づき適正に撤去・処分を行っています。2024 年度は、右表のように、アスベスト含有建材を計 2 m<sup>3</sup>撤去・処分しました。

【アスベストの撤去・処分の実績(2024 年度)】

建 物	工事内容	施工部位	石綿区分	搬出数量
理学部 3号館	改修	パッキン	レベル3	2 m <sup>3</sup>

### 高圧ガス

本学では、高圧ガス危害予防委員会が、作業にあたる教員や学生へ高圧ガスの危害を防止し安全な取扱や関連法規を学ぶ講習会の計画・実施などを行っています。窒素やアルゴンなどの不活性ガスは各研究室で薬品管理支援システム IASO に登録して管理しています。また、可燃性ガスである水素および酸素は建物全体で一括管理しています。



【水素と酸素のボンベ庫】

### 危険物

本学では消防法の「危険物」「少量危険物」に該当する薬品については、消防署に届出を行い、所定の「貯蔵取扱所」に格納し、それが所在する建物にはその種類や特性（火気厳禁、禁水）などを明示し、研究室扉には異常が発生した際の連絡先などについても明記しています。

使用者は危険物取扱者（甲種）の資格を取得し、所定の年限ごとに講習を受け更新しています。



【建物入口の掲示】



## (10) 廃棄物



本学では、廃棄物の減量と再資源化の促進を図るため分別収集を徹底しており、キャンパスガイド(学生便覧)により学生への周知を行っています。また、「文京区廃棄物の処理及び再利用に関する条例」に基づき、「事業用大規模建築物における再利用計画書」を作成し、廃棄物の排出量の対前年比 1%減を目標として掲げています。

2024 年度の大塚1団地の廃棄物の総排出量は、対前年比で約



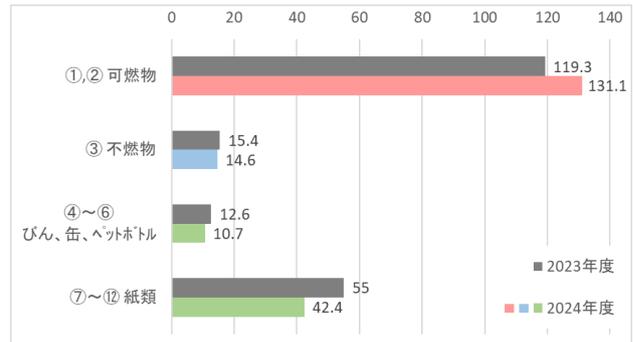
【鉄材の再資源化】



【電線類/銅線の再資源化】

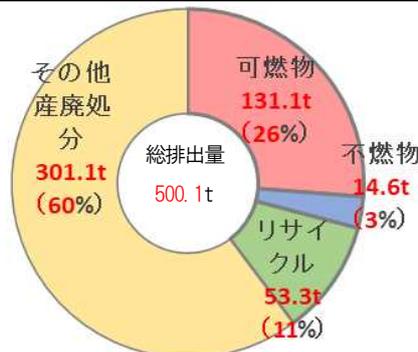
2%減少しました。以前は大規模改修工事で撤去した鉄材や電線類(左下写真)は、金属くずとして大学構内に集積し、リサイクル業者に売却することで大学の収入としていましたが、2022 年度以降は、工事請負業者が売り払い、不足する工事費に充てています。

### 【廃棄物の排出量の前年度との比較】



### 【2024 年度の廃棄物の排出量一覧】

番号	ゴミの種類	対象	分別種類	2024 年度の排出量(t)
①	生ゴミ	弁当くず、茶殻、他	可燃物	10.7
②	紙くず	落ち葉、わりばし、他	可燃物	120.4
③	プラスチック類	弁当容器、カップ麺容器、ラップ類	不燃物	14.6
④	びん	飲料びん(ガラス)	リサイクル	1.8
⑤	缶類	飲料缶(アルミ、鉄)、缶つめの缶	リサイクル	3.4
⑥	ペットボトル	飲料用ペットボトル	リサイクル	5.5
⑦	古紙(OA紙)	コピー用紙、OA紙、他	リサイクル	0.9
⑧	古紙(機密文書)	機密文書(一括処理文書)	リサイクル	10.3
⑨	古紙(雑誌)	雑誌、パンフレット、色付き紙	リサイクル	18.5
⑩	古紙(新聞)	新聞、折込チラシ	リサイクル	0.6
⑪	古紙(ダンボール)	ダンボール	リサイクル	9.0
⑫	古紙(ミックスペーパー)	シュレッダーごみ、他	リサイクル	3.1
⑬	家電リサイクル品	家電品	リサイクル	0.2
⑭	金属くず	金属片、金属製品	その他廃棄処分	29.4
⑮	廃棄プラスチック	プラスチック	その他廃棄処分	0
⑯	その他混合廃棄物	木くず、金属、ガラ、陶器類等	その他廃棄処分	271.7



## (11) その他

### 環境配慮契約

本学では、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律」に基づき、毎年、本学における「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を策定・公表し、これに基づいて環境物品等の調達を推進しています。

2024年度の特定調達品目の調達状況は下表のとおりであり、すべての品目において調達目標を達成しました。

#### 【特定調達品目調達実績(2024年度)】

分野	品目	総調達量	特定調達物品等 調達量	調達率
紙類	コピー用紙等	15,586 kg	15,586 kg	100%
文具類	事務用品、OA用品等	86,461点	86,461点	100%
オフィス家具等	椅子、机、什器等	785台	785台	100%
画像機器等	コピー機、インクカートリッジ等	873個	873個	100%
電子計算機等	電子計算機等	737台	737台	100%
オフィス機器等	シュレッダー、一次電池等	2,994個	2,994個	100%
移動電話等	携帯電話等	12台	12台	100%
家電製品	冷蔵庫、電子レンジ等	11台	11台	100%
エアコンディショナー等	エアコンディショナー等	10台	10台	100%
照明	蛍光灯等	98個	98個	100%
インテリア・寝装寝具	カーテン、ふとん等	358枚	358枚	100%
作業手袋	作業手袋	22組	22組	100%
その他繊維製品	集会用テント、モップ等	152点	152点	100%
設備	Web会議システム	37件	37件	100%
災害備蓄用品	災害備蓄用飲料水、食品等	8,724本	8,724本	100%
役務	印刷、清掃、輸配送等	8,278件	8,278件	100%
ゴミ袋等	ゴミ袋	7,298枚	7,298枚	100%

### 樹木管理

キャンパス内の樹木管理については、枯れ枝の落下等の危険を防止し安全・安心なキャンパス環境を実現するために、定期的に樹木の剪定を実施しています。特に、敷地周縁の樹木については、枝や落ち葉の越境により近隣住民に迷惑をかける可能性があるため、比較的短い周期で剪定を計画しています。また、台風や暴風等による荒天後は、樹木の倒木や枝折れの危険性が高いため、職員によるキャンパス内の巡視を行い、倒木や枝折れの剪定・撤去を早期に実施しています。

## (1) 大学の取り組み



## 環境美化

本学は銀杏並木や桜、紫陽花、つつじなどが四季折々に見事な表情を見せてくれる緑豊かな環境です。そのため、台風など自然災害の後には倒木や大量の落ち葉が発生しますので、その都度、職員や業者が処理しています。

また、危険な害虫についても、職員や駆除業者、清掃業者がこまめに駆除して、学内環境と安全を維持しています。



自転車は、年度限りの駐輪許可書を発行し、学内所定の駐輪場にとめられるようにしています。定期的に職員が見回り、貼り紙をして注意喚起しても所有者が現れない放置自転車は学内リサイクルで譲渡したり、無償引き取りの業者に引き取ってもらったりと資源の有効活用や経費削減に努めています。

ゴミステーションでは、学内で出るゴミを細かく分別しています。段ボール、プラスチック、古紙、可燃ゴミ、瓶、缶、ペットボトル、電池、蛍光灯などに分別されたゴミは業者が

引き取った後、リサイクルできるものについてはリサイクル業者が引き取り粉碎圧縮してあらたな資源として再生しています。

大型な不要物品は、倉庫にとりまとめ、定期的に業者が回収します。また、パソコン等電子機器など買い取り対象となるものについては、ひとつの倉庫に集約し業者にひきとってもらい、大学の収益となっています。サイズ、内容にかかわらず、使えるものは学内の「リサイクル掲示板」で希望者に譲渡する取り組みが続けられています。



【ゴミステーション】



【産廃系ゴミ置場】

読み終わった本、DVD等を附属図書館に持ち込み、図書館から古書店に引き取りを依頼すると、その買い取り金額がお茶の水女子大学未来開拓基金に全額寄附され、学生用図書の充実につながるプロジェクト(お茶の水古本募金)を行っています。2024年度は、5月25日のホームカミングデーで、OGのみなさんにも古本募金への協力を呼びかけました。

## (2) 附属学校園の取り組み



## 附属幼稚園：環境を守る活動

- ① 幼稚園は自然がとても豊かで、様々な樹木が植えられています。恵まれている一方で、寿命が近づいてきて、枝落ちや倒木の危険もないわけではありません。2024年度夏に樹木医診断の結果、お庭にある梅の木は、根元空洞がわかり、最後の花を咲かせたあと、抜根しました。そして、お山の上に、新しい梅の木を植え、これからも安心・安全に、お花や梅の実を楽しみたいと思います。



- ② それまでは、2学期直前にマンボウクラフトの岩井さんと、教員、同窓会組織「ちぐさ会」の方々で行っていた園児用机や椅子のニス塗りでしたが、2024年度は酷暑ということで2学期終業式直後に行いました。ヤスリで古いニスを落とし、人にも環境にも優しいニスを塗っていただいております。昭和の時代から使っているモノを美しく蘇らせ、大切に思う気持ちが育まれるようにと願って取り組んでいます。



③ 毎年のことですが、2024 年度も保護者の方々に、園舎周りや屋上の清掃をボランティアで行っていただきました。身近な人の姿を通して、子どもたちが環境を大切にする気持ちにつながることを願っています。



### (3) 学生主体の取り組み



#### 学園祭(微音祭)

毎年11月に開催している学園祭(微音祭)では、学生主体の微音祭実行委員会による運営のもと、学園祭で排出されるゴミの分別を徹底しており、サークル等により出店される模擬店では、「エコ容器」や「間伐材を使用した割り箸」を使用し、地球環境に配慮した学園祭を目指しています。



【ゴミの分別】

【再利用が可能な弁当容器】

#### 学生プロジェクト

##### ■ごみ箱表示改善プロジェクト

「ごみ箱表示改善プロジェクト」は、学内で正しくごみの分別が行われることを目的としたもので、有志の学生によって企画立案され、当該学生が卒業した現在までその成果は活用されています。本プロジェクトでは、ごみ箱に貼る分別表示の作成や、紙資源のリサイクル促進のためリサイクルボックスの購入・設置が行われています。



【ゴミ箱の分別表示】

【紙類回収ボックス】

##### ■中古教科書の再利用

STUDY FOR TWO(お茶の水女子大学支部)は、2012年に活動を開始し、使わなくなった教科書や書籍の寄付を募り、それを約半額の金額で再販売し、得られた収益をタンザニアの子どもたちの教育支援のために寄付をする活動をしています。

不用となった教科書や書籍は、学内や学生寮に設置した計9つのボックスで回収し、毎年4月と10月の学期初めに「中古教科書・書籍」として販売しています。収益の80%は、開発途上国の教育支援として使われています。



【不用となった教科書の寄附】

【中古教科書の販売】



## (1) 大学の取り組み

### SDGs 推進研究所

2022年4月に設立されたSDGs推進研究所の3年目の実施事業のうち、OCHA-SDGs学生委員会が関わった環境への取り組みについて紹介します。OCHA-SDGs学生委員会はEducation for Sustainable Development(ESD)班、食班及び広報部に、味覚評価部他大学連携班といった学生が活躍する組織です。

#### Sustainability Week 2024 開催報告

4月22(月)～4月27日(土)、他大学SDGsイベントであるSustainability Week 2024を開催しました。

このイベントのテーマは、SDGsについて自分ごととして考える1週間であり、①地球環境に関心を持つ人材育成、②大学の壁を越えた交流、③社会への発信を主な目的として発信しました。

2023年度9月から、UTokyoGXSN(東京大学)、プラゴミ減らし隊(東京農工大学)、ECHO-UT(筑波大学)、OCHA-SDGs学生委員会(本学)の4大学の学生組織で、Japan Sustainable University Networkを結成し、共催という形式でこのイベントの準備を進めてきました。

後援はそれぞれ、東京大学、東京農工大学農学部、筑波大学、本学SDGs推進研究所と、各大学生協、図書館の皆様です。

4大学間で共通した企画としては、Sustainability Talks(講演会)やワークショップを実施しました。本学のTalks(講演会)には、先生方8名と環境省のデコ活応援隊の方2名がご登壇され、SDGsに関する大変貴重な研究やお話を沢山お聞きすることができました。対面とオンライン合わせて、70名近くの方が参加されました。

ワークショップは、UTokyoGXSNの方が中心となって企画したBoomerang Workshopを開催しました。「人の活動の影響が結果的に人に返ってくる」(Boomerang)という意味が込められています。

また、各大学企画として、本学はSDGs図書展示やプラントベースドフードの学食販売を実施しました。プラントベースドフードはOchas(大学公認サークル)とのコラボ企画で、300食以上もの売り上げになりました。

最終日は、4大学の枠組みを超えて複数の大学の学生組織が対面で集まり、大学間交流イベントを行いました。Climate Freskという環境問題を体系的に理解できるカードゲームなどを通して、他大学の学生との関わりを作ることができました。



【Sustainability Talksの様子】



【Boomerang Workshopの様子】



【SDGs 図書展示】



【プラントベースドフード】

## 文京区クールアースフェア 2024 出展

8月10日(土曜日)午前10時～午後3時に、文京シビックセンターで開催された「クールアースフェア」で、活動紹介に関する展示やワークショップを行いました。

本学学生委員会は、「サステナ・ワールド・みてわかるかいてつくる幸せな未来の絵本～」というタイトルで出展しました。このワークショップは、子どもたちを中心に幸せな世界を想像してもらい、自由に描いてもらった絵を使って、絵本を作るというものです。

また、東京大学 GX 学生ネットワークと東洋大学 SDGs アンバサダーの方々と共同して行った SDGs に関するスタンプラリーも、年齢問わず多くの方々に参加していただきました。



【クールアースフェア 2024 のチラシ】



【学生委員の作成した展示物】

## 構内フードドライブ実施

本学は、2022年9月26日に株式会社セブン&アイ・ホールディングス(東京都千代田区)とSDGsに関する包括連携協力協定を締結しました。以来、産学で連携して、持続可能な社会の実現に向けた研究成果の社会実装に取り組んでいます。

今年度も、本学のSDGs推進活動の一環として、フードドライブを実施しました。6月より附属学校園(幼稚園・小学校・中学校・高等学校)と協働で実施しており、たくさんの食品が集められました。

※フードドライブ:家庭で食べる機会を失った食品を持ち寄り、福祉団体やフードバンク(NPO、社会福祉協議会など)に寄付する活動

今年度は、本学で140個、約37kg、附属学校園も含めた全体では724個、約125kgの食品が集まりました。

来年度以降も、本学のフードドライブでは、受け取る人を思いやって食材を選ぼうという「おすそ分け」のコンセプトを大切に活動していきたいと思っております。



【学生委員が作成したポスター】



【回収箱の様子】



【集まった食品】

## (2) 附属学校園の取り組み



### 附属幼稚園 — 環境体験の紹介 —

#### 東村山郊外園における環境体験

これまでの環境報告書では、園庭にある実のなる木や畑から得る体験をご紹介してきました。今回は、西武新宿線萩山駅から徒歩数分のところにある畑(郊外園)での取り組みを取り上げます。

#### 1. 郊外園の昔と今

国の勤労作業教育促進を受けて、昭和14年2月、附属高等女学校が東村山村萩山に郊外園を開設したのが始まりです。附属幼稚園では、昭和39年からこの地(当時は久米川郊外園と呼んでいました)でサツマイモ掘りを行うようになりました。昭和63年からは、10月の「サツマイモ掘り」だけではなく、6月に「ジャガイモ掘り」にも行くようになりました。ジャガイモは、4・5歳親子で、サツマイモは5歳親子で行っていたのですが、コロナの時期以降、5歳のみで行くようになり、その代わりに4歳親子で、12月に大根掘りを実施しています。

また、東村山郊外園は、以前は幼稚園・中学校・高校で一箇所を分割して使用していましたが、中・高が撤退したこともあり、2020年、少し離れた場所にあった小学校の畑を開墾して幼稚園の畑を設けました。

#### 2. 当日の様子

朝、郊外園担当の岩崎さんと先生たちで畑の準備をしながら、親子を待ちます。駅まで担当が迎えに行き郊外園の門に入ってくる親子の表情は、楽しみな気持ちと「たくさん採るぞ」という気合に満ちあふれています。

岩崎さんから、掘るコツを教えていただき、さっそく畑に入ります。ジャガイモは、茎を引っ張るとたくさんのイモがいっぺんに取れます。サツマイモは、つるを畑の外に出してから掘り始めます。土にしっかりと根付いているので、一つ掘るのも大作業。イモによって成り方や掘り方が違うという気づきが生まれています。葉っぱ付き大根は、4歳児の背丈ほどの大きさになっているものもあり、1本ずつ運ぶのも一苦労です。

親子で持ち帰る分と、幼稚園に届ける分で、かなりの量を掘ることになります。虫を追いかけたり、土団子を作ったり、取り組み方はそれぞれですが、広い空のもと、気持ちよく作業は進みます。

作業後は、持参の弁当の他に、茹でたジャガイモ、取れたサツマイモや大根を使った味噌汁も食し、笑顔が広がります。最後は岩崎さんに御礼を伝え、大荷物を抱えて、畑をあとにします。

土や収穫物の匂いや感触は、体験したからこそ記憶に残ることでしょう。そして親子で感想や「どうやって食べようか」と話すことや、弁当に入れてくださっていることもあり、郊外園と家庭と幼稚園と体験したことがつながりあえていると感じています。



【ジャガイモ掘り】



【じゃがいもれすとらん】

### 3. おすそわけ

幼稚園に届けられた収穫物は、他の学年の子どもたちや、大学、中学、高校、守衛さん、ナーサリー、こども園などにおすそ分けをしています。自分の手で収穫したものを届けに行く子どもたちの表情は誇らしげです。また、ジャガイモは、「じゃがいもれすとらん」と称して、5歳児が3,4歳児に蒸かしたジャガイモをふるまいました。前日、園庭で約300個近く洗い、当日はボランティアの保護者に手伝っていただき、最後は自分たちも食して、おいしい時間となりました。

一つの活動が、それだけで終わるのではなく、つながったり、新たなことを生み出したりすることを大切に捉えながら、豊かな経験を積み重ねたいと考えています。



【サツマイモ掘り】



【大根掘り】



## 附属小学校 — 環境授業の紹介 —

小学校家庭科は、自分たちの家庭生活を見つめるだけでなく、家庭と結び付き、支え合う地域や社会環境についても目を向け、その一員として、自分がよりよく生きることについて考えます。広く地域や社会、地球全体の課題を考えた取り組みをご紹介します。

### 5年生

#### 「お茶小ONGsオーニギーズ(おにぎりアクション)」の取り組み

- 5年生の家庭科で「炊飯」の学習をすること、「環境(SDGsに関すること)」について学習することの関連を図り、私たちにもできる持続可能な社会に向けた取り組みの1つとして「おにぎりアクション」に参加しました。まずは、学習のはじめにSDGsを中心とした地球規模の課題や実態を調べたり、理解したりすることに取り組みました。そして、その課題意識をおにぎりアクション参加の意欲に繋げるようにしました。題材名は「お茶小ONGs(オニギリ)チャレンジ」として、この活動の輪を小学校からさらに広げようと、附属幼稚園、中学校、高等学校に向けて、一緒に参加するよう呼びかけることにしました。ポスターやチラシ、説明動画を作成し、各附属学校園へ渡すなどすることと、おにぎりの写真を見合うことをして、人とかかわりや活動の広がりを実感できるようにしました。附属学校園全体で活動を盛り上げて、より大きな活動にすることができました。



【幼稚園との交流の様子】

5・6年生

「フードドライブ」の取り組み

■ これまでも、小学校家庭科の授業と関連を図って本学と附属学校園全体で「フードドライブ」に参加してきました。今年度は、本学SDGs推進研究所の学生委員の皆さんに、6年生との交流授業をしていただくことができました。学生委員さんからは、余っているという理由だけでなく、本学に根付く“おすそ分けの気持ち”で参加するフードドライブについて教えていただきました。2日間の実施で、下の写真のようにたくさんの食品を集めることができました。



【フードドライブ実施の様子】



林間学校を中核においた自然や環境との共生学習(第2学年)

1. 事前学習

①【道徳】「ソーセージの悲しい最後」(自然愛護・1年生)

自然(動物)は守るべき大切な物ということはわかっている、人間側の都合で命を奪わなければならないこともあります。その葛藤の中で、解決に向けてどう考えるか問いかけてきました。

②【総合】志賀高原ユネスコエコパークについての調べ活動(2年生)

班ごとにテーマを立て、志賀高原やユネスコパーク自体について、あるいは共生のために行われている取り組みについて調べました。最後にガイドさんに聞いてみたいことを話し合いました。

③【道徳】「身近な自然とのつながりを考える」(自然愛護・2年生)

「自然と共生するために大切なこと」の視点で都会の生活の中での「自然とのつながり」を見つける所からスタートし、そのつながりが「人間と共生できているか・できていないか」「つながりの主体が人間か自然か」という視点から整理しつつ、身近な自然との共生について考える授業を行いました。

④【道徳】「自然との共生の形について考える」(畏敬の念・2年生)

事前学習の総括として、身近な自然との共生と志賀高原での自然との共生について、PMIチャートで整理した。うまく共生できている点(plus)、共生に向けて課題がある(minus)、もっと知りたい(interesting)の視点で整理しながら、林間学校でのディスカッションに向けた準備を行いました。

2. 林間学校

【目的】

- ① 自然を愛する心をはぐくむとともに、自然や人々との関わりを通して共生についての新たな見方・考え方を身に付ける。
- ② 時間や決まりを守る、役割を果たす、周囲を思いやるなど、集団行動に必要な態度を伸ばす。
- ③ 学修した内容を整理して様々な表現方法を活用し、伝える方法を身に付ける。

【主なプログラム】

- 初日：ユネスコエコパーク環境学習講義  
自然探勝コースを歩く
- 2日：池めぐり登山・志賀高原核心地域を歩く
- 3日：シナノキせせらぎコース・緩衝地域を歩く

※ガイドの話聞きながら自然環境との共生を学ぶ生徒たち(写真)



3. 林間学校ユネスコエコパーク学習のまとめ(事後学習)

事後学習では、「志賀高原での学びを踏まえ、人と自然との共生を考える」をテーマに、問いを立て、その問いに答える形で「共生のための提案」を行いました。林間学校での学習成果を活動班ごとにスライドにまとめ、学年発表会や生徒祭(文化祭)で発表する学習を行いました。生徒たちは志賀高原林間学校での体験を通して、自然と人間の共生について考えを深めていました。

**志賀高原(ユネスコエコパーク)とは?**



ユネスコエコパークは役割の異なる3つの地域に構成されています。

- 核心地域**→法的にも厳しく保護され、長期的に保全されている地域
- 緩衝地域**→学術研究やESD教育などの場として活用されている地域
- 移行地域**→人間の生活圏を対象とし、自然環境の保全と調和した持続可能な地域社会の発展を目指す地域

**【ユネスコエコパークとは】**  
豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域。(登録地域数：134か国748地域。うち国内は10地域。)

**【志賀高原】**  
・標高1,300m~2,300mに及ぶ高原地帯  
・古くから自然の恵みを生活の糧にしていた地元住民によって豊かな自然環境が守られてきた  
・希少な高山植物や豊かな自然にしか生息しない貴重な動物が生きて暮らしている  
・持続可能な自然環境が保たれている世界でも数少ない自然公園

志賀高原自然保護センター「自然環境について」  
<https://shiga-hiogo-center.shiga-nature.or.jp/>  
(2024年7月3日)  
日本ユネスコエコパークネットワーク「日本ユネスコエコパークネットワーク「UNESCO」とは」  
<https://main.jp.nsn.or.jp/>  
(2024年7月3日)

## 「私の「のはらうた。」～自然の中の大罪に”なりきって、世界を見つめ直す(1年国語科)」

### 1. 単元のねらいと概要

国語科における創造的な思考の習慣として「なりきる」「言葉のリズムにこだわる」ことが挙げられる。「なりきる」ことは他者の視点に立つことで磨くことができ、「言葉のリズムにこだわる」ことは七五調などの日本の伝統的な音律の美や押韻、反復などの技法を味わうことで体得することができます。

単元「私ののはらうた。」は、自然の中からなりきる題材を決め、その題材の視点で世界を見つめて発見したことを詩の形式で表現する創造的な活動です。

### 2. 単元のねらいと概要

#### (1)第一次(1時間)詩を味わう

工藤直子著「のはらうた」(教科書)から印象に残った詩を選び、工藤直子氏の詩創作に関する動画も参考にしながら、詩にあったグループにて即興で群読を行います。教師のモデルを含んだ「のはらうた」9編を読み、自然の中から題材を探します。

・群読の工夫:一人で読む、複数で読む、声の大小、スピード、トーン、強弱、声色、リズム、間等

#### (2)第二次(1時間)表現技法の効果について考えます。

生徒にとって身近であるアニメソングで表現技法の使われ方を理解し、効果を考えます。

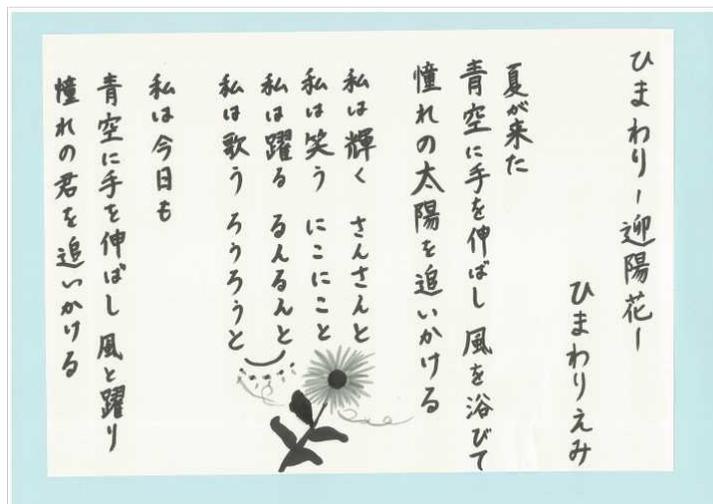
- ・「アイドル」YOASOBIより:体言止め、省略法、対句法、反復法、擬態語、押韻
- ・「残酷な天使のテーゼ」高橋洋子より:直喩、隠喩、擬人法、倒置法、呼びかけ

#### (3)第三次(2時間)「私ののはらうた。」を書く

自然になりきって題材を決め、詩を通して伝えたい内容に合うように、詩の表現の方法を考えます。

### 3. 成果と今後の課題

創作された詩に思考の習慣の自覚化が見られた。具体的には生徒たちは表現技法を理解し使うこと、言葉のリズムにこだわることを実現しようとしていました。ここでは「ひまわり」を書いた生徒Aの作品(右)と振り返り(下)から分析します。「ひまわり」は三連構成で書かれた自由詩で、太陽に憧れたひまわりが夏の陽射しの中で様々な表情を覗かせる様子を、擬人法、対句、押韻などの表現を用いて豊かな言葉で表現した作品です。この生徒の詩の言葉は、それまで学習したことを生かそうとしている様が見て取れました。



## 「都市問題」を考える(1年社会科)

本授業では、アジア州のメガシティの定義とその位置や分布を確認し、その規模を東京大都市圏と比較して把握しました。次に、東京の過去から現在の都市問題を事例に、都市問題とはどのようなことかを理解しました。そのうえで、学習班(3~4人のグループ)で調べてみたい都市を選択し、工業化等の進展による都市への人口集中に伴い、どのような都市問題が発生しているのか調べ、それを背景とともに関係図にまとめる作業を行いました。

第5時では、前時に引き続き都市問題を調査し図にまとめた後、どこでどのような都市問題が見られるのかクラス内で共有しました。大気汚染や交通の問題、治安や経済的な格差の問題などが類似点として見出せました。ここから、人権や持続可能性の観点から、一つのテーマを学習班で絞り込んで、都市問題の改善に向けた考察・構想に取り組みました。

第6時・第7時では、絞り込んだ都市問題について、その現状や現地で行われている取り組みを調べたり、問題が解決された望ましい状態や、現地で行われている取り組みの改善策を話し合う活動を行い、その結果をスライドにまとめる活動を行いました。そして、11月5日7日(1時間を想定して発表が収まらなかったため、2時間で実施)第8時では、班ごとに作成したスライドを用いて発表を行いました。この後、ここまでの単元の振り返りとして、アジア州までの4単元をまとめたレポート課題に取り組みました。

### 【生徒が作成したスライドの例~梅組B班】



#### 2. 都市問題が解決された「望ましい状態」

- 道路を増やし、**交通渋滞が緩和**される状態。
- 自家用車だけでなく、**公共交通機関も同じくらいの利用者がいる**状態。
- 車道に**余裕ができる**状態(横幅を広げる、整備を行っているなど)

今の道路は車が4台並べるくらいのスペースしかない

#### 3. 「望ましい状態」に向けて、現地で取り組まれている対策や取組

- 4in1制**  
⇒通勤時間帯には、**4人以上車に人が乗っていないと主要道路に入れない**ようになる。
- 奇数、偶数規制**  
⇒ナンバープレートの数字が奇数か偶数かによって道路の通過を制限する。

東京 300  
あ 12-34  
8:00-10:00まで道路を通過できる!!

#### 4. 望ましい状態に近づくため必要なこと(現在の対策や取組への意見や改善案)

〈自分たちの考え〉

- 公共交通機関をもっと整備**して、自家用車以外の移動手段もあるようにする。
- 車の道の誘導を行う。(人件費などのことも考え、**機械で行う**のが望ましい)
- 道路の**横幅を広く**する。
- ラウンドアバウト**(環状交差点)を作る。 ⇒

〈現在の取組への意見〉

- 4in1制度について  
⇒バスを増やすことで、一台の車に対して沢山の人が乗れるようになると思うので、やっぱり**公共交通機関を増やしたほうが**いいと思う。

公開研究会での授業を通して、「目指す理想像を仲間とすり合わせ(対立⇒合意)、よりよい姿を共に(仲間の意見にも配慮しながら)考えようとする」姿が見られました。こうした姿はこれからの時代の市民として社会課題の解決をかんがえていくための重要な資質であるとともに、社会科の授業で引き出すことのできる「創造的思考の習慣」なのではないかと考えました。

「**椋鳩十作品の読み比べから自然を考える**」を考える。(2年国語科)

国語科では、文学作品や説明文作品を通して文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。」「(2年Cよむこと・オ)を指導します。3年生ではさらに「文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。」「(3年C読むこと・エ)へと発展します。本単元では、こうした指導内容を踏まえて、読むことの学習を通して「自然と人間の関わり」について考えるきっかけになるように考えました。

授業は教材を読んでジグソー法と呼ばれる学習交流の手法を用いました。この過程で、読んで気づいたことや考えたことを、スライドにまとめ、交流場面ではこれを示して考えを深め合いました。

【授業の展開】

学習課題:「椋鳩十」はどのような考えや思いを持っていた作家だったのだろうか? 屋久島が舞台となっている複数の作品を通して考えよう。

- ①「片耳の大鹿」を読んで、人物や場面を整理し、「椋鳩十」の自然に対する思いや考えをまとめる。
- ②椋鳩十の作品群を読み、ジグソー学習で読みを深め合う。
- ③クロストーク(交流会)で掲示するためのスライド資料をまとめる。
- ④クロストーク(交流会)を開いてお互いの考えを深め合う。

【交流用スライドの例】

1班 メンバー:

〈結論〉  
人間が自然を壊しているという行為は悪いことだと自覚するべきだけれど、人間と自然が対等な立場で助け合って共生していくすばらしさを伝えたかった。

〈根拠〉  
「野生の叫び声」では人間の自然を壊す行為について書いてありました。一方、「野獣の島」では自分たちに害を与えるものに共同して当たる、「大造じいさんとガン」では弱ったがんと人間が救うという動物と人間の共生について描写されていたので、これら3つを合わせて共生の素晴らしさについて伝えたかったと思ったから。

5班 メンバー:

〈結論〉  
椋鳩十は自然の動物たちにとっても**親しみを持ち、適切な距離感で触れ合っていきたい**という考えを持っていたと思う。(動物と人間の共生が容易ではないことに對するもどかしさを物語で描いている)  
共生→適切な距離で関わり合う

〈理由〉

- ・動物たちが**生きる場所を失ってしまったことに対する怒りの気持ち**を強く表していた(野生の叫び声)
- ・動物に過干渉しすぎてしまって、**動物たちの住処を奪ってしまっている現状を批判**していたから(野生の叫び声)
- ・動物たちと積極的に関わりたいけど完全に混じり合うことはできないということを知っていたためそのもどかしさを表していた(大造じいさんとガン)
- ・どこまでの距離感で接すればよいのか戸惑いの気持ちもあったのではないのか(大造じいさんとガン)
- ・**共通の目的意識を持つ**ことができれば、十分に野生の動物達と助け合ったり、共に生きることができる(野獣の島)

1班 メンバー:

〈結論〉  
「椋鳩十」は自然へのリスペクトを大事にするべきだ**という考え**を持っていたと考えられる。なぜなら、違う動物でもお互いに協力したり、助け合ったりする描写や、人間と動物は対等であるという主張が作品の中で多く見られるためである。

→命や環境を頂戴する所もあるが、必ずしも人間が自然の中で上とはかぎらないため、適切な距離感を持ってお互いにRespectするべき。(野せの叫び声での猿たちの気持ちになってみたら)

命がある生物である私達は食べる食べられるの関係ではあるが抗えない自然や共通の敵の前ではお互いに助け合うべきだと主張しているのではないだろうか。また、それは動物だけではなく私達人間も互いに助け合うべきだ**と思っているのでは**。(野生の島での鷺相手に戦う展開や大造じいさんとガンではやぶささと戦う所から)

椋鳩十は人間と①**人間以外の動物**が同じ立ち位置。つまり「人間と①は一括りにできる」という考え方を**持っている**。動物という簡単な一括り【つまり共生】を椋鳩十は思い出させてくれた。

4班 メンバー:

〈結論〉青(根拠)黒(予想)赤(まとめ)太字

- ★「椋鳩十」は**何よりも自然を受容する心を持っていた**と考える。『野生の叫び声』では「胸の痛み思いがしたのでした」というところで、逆の言動をしている人間を哀れだ**と思っている**。最初の段落でも、屋久島の自然の美しさについて述べ続けていることから、自然が好きなの**がわかった**。
- ★「椋鳩十」は**自然の厳しさを伝えていた**と考える。なぜなら最初に授業で読んだ『片耳の大鹿』の吉助さんたち一行が雨に見舞われていたり、『大造じいさんとガン』では、はやぶさががんの群れを襲うという自然の恐ろしさを語っていること**からである**。また、そこから**自然にいいところがある一面、厳しさも伴う**という**ことを伝えている**と予想した。
- ★「椋鳩十」は**自然の助け合う姿勢をみんなに知ってもらいたい**と**思っている**。なぜなら、『大造じいさんとガン』では仲間を守るために怪我をした残雪を大造じいさんが助けるという姿勢や、『野獣の島』では鹿狩りで自分が攻撃された際に、大鹿に助けをもらっていた**からである**。授業内で見たVTRでは、戦争をする人間に**命の尊さを知ってもらいたかった**から**だと言っていた**。また、『野獣の叫び声』では自然を人間のために壊していることに拒否を示している。その考えや、自然と関わる人間の話を書いていることから、**人間と自然の動物は対等な関係であるべきだ**という考えを持っているのではないかと**予想した**。
- ★「椋鳩十」は**自然を愛し、自然の厳しさを知るうえで助け合いや自然の摂理による『狩り』は良**いが、人間の一方的な『狩り』や**自然の破壊は良くない**という考えを持っている。

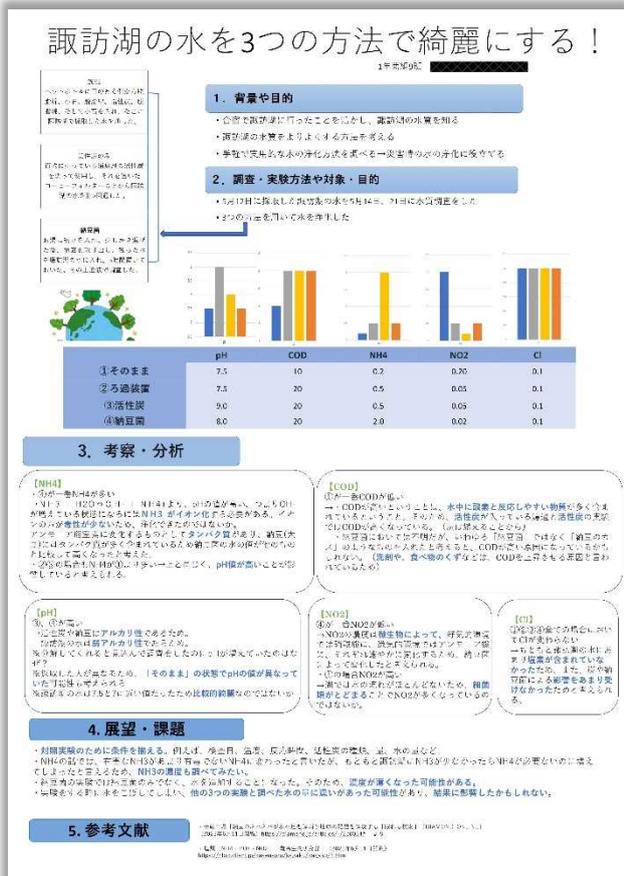
本学習を通して、生徒たちは椋鳩十作品を文学として味わうと共に、自然環境やそこに生きる動植物たちの共生や、自然と人間の関わり方について、さまざまな気づきを得た様子をうかがうことができました。



# 附属高等学校 — 環境授業の紹介 —

## 1 年生必修 課題研究 I

- 共立理化学研究所のバックテストを利用して、グループごとに決めたテーマで水質調査を実施し、ポスター発表を行いました。諏訪で行われる学年合宿でも試料水を採取する機会を設け、生活排水や周辺の地質といった環境が河川や湖の水質にどのように影響しているかを探究的に学習しました。(テーマ例)「諏訪湖の水を3つの方法で綺麗にする！」



- 地図を利用して疫学的に公害問題の課題解決を行った例として、イタイイタイ病を取り扱い、地図や GIS(地理情報システム)を社会課題の解決に活かしていく視点を身に付けました。
- 気候変動の要因として、化石燃料の消費や森林破壊など、人為的な要因があることを学び、気候変動への緩和策と適応策について考えました。
- 世界各地の生活・文化の単位では、地域からみる諸課題として、中国の大気汚染、東南アジアや南アメリカの熱帯林の破壊、アフリカ・サハルの砂漠化などを取り上げました。

## 3 年生選択 地理探求

- 地球的課題として、環境問題を扱い、資源エネルギー問題、人口問題、食料問題との結びつきを考えました。

## 2 年生必修 歴史探求

- 日本列島の形成や稲作の開始を扱う際、気候変動による地形や食資源の変化が大きく影響したことを学び、人々の生活を自然環境とのかかわりの中でとらえる視点を身に付けました。
- 『伊勢神宮 森から生まれた祈り』(紀伊國屋書店)の一部を視聴し、近世における神宮林の伐採と水害の多発の関係を学び、自然崇拜や宗教的な規範と環境保全との関係について考えました。
- 近世の江戸では大火の被害を軽減する都市計画がなされたことや、近郊の農村部との関係も活用してごみを出さない生活様式が構築されたことなどを学び、持続可能な生活様式の構築を支える要素について考えました。

## 1 年生必修 地理総合

- 地球的課題の1つとして環境問題を取り扱いました。大気汚染、熱帯林の破壊、砂漠化、地球温暖化の現状などについて具体的に学び、持続可能な社会のあり方について考えました。  
また、人口問題、食料問題、居住・都市問題、資源・エネルギー問題などの地球的課題を扱うなかで、それらが環境問題と複雑に絡み合っていることを学びました。

### 3年生選択 日本史探求

- 古代・中世の気候が不安定な時期と比較的安定した時期にそれぞれ社会がどのように変化したかを学び、気候変動の社会に与える影響について考えました。
- アイスへの同化政策を扱い、そうした生活文化の変容が環境にどのような影響を与えたのかを考えました。
- 足尾鉍毒事件を扱い、近代化の過程でどのような環境問題が生じたのかを学びました。
- 高度経済成長期に始まった四大公害裁判を扱い、発生時期が異なる4つの公害病に関する訴訟がこの時期に始まったのはなぜかを考えました。一方、環境基本法の制定までに時間を要した要因についても考察し、開発と環境をめぐる歴史を学び、今なお残されている課題にどのように取り組んでいくかを考えました。

### 2年生必修 課題研究Ⅱ

- 地球温暖化や大気汚染、水質汚染、生物多様性の喪失などさまざまな環境問題をテーマに、課題探求を行っている生徒がいます。

### 1年生必修 家庭総合

- サステイナブル、エシカルを軸としながら身近な生活の中の科学を学びました。
- 環境配慮の新型有機草木染めで有機素材バックとセルロースなどの染色実習を行いました。
- サーキュラーエコノミー、食品ロス、海洋プラスチック、服の大量廃棄など環境について学び、環境問題についての話し合いなどを実施しました。

### 1年生・3年生必修 家庭総合

- 調理実習では、生分解性 100%のエコ洗剤、マイクロプラスチックの出ないセルローススポンジ、生ゴミの処理にはコンポストを使用。排水をできるだけ汚さず、食品ロスを可能な限り少なく、省エネルギーの調理方法を用いた、エコ調理を実施しています。



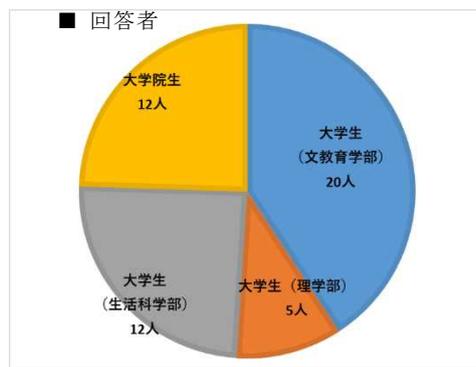
## (1) 環境に関する規制等の遵守状況

法 令	本学の規程	本学の体制	2024年度 法令遵守状況
<b>【環境】</b> ■環境基本法 ■環境配慮促進法 ■環境配慮契約法 ■グリーン購入法 ■環境教育等促進法		財務課 施設課	○
<b>【地球温暖化対策・省エネルギー】</b> ■地球温暖化対策の推進に関する法律 ■エネルギーの使用の合理化等に関する法律 ■フロン排出抑制法	キャンパスマスタープラン エネルギー管理標準	省エネルギー推進体制 施設課	○
<b>【水質・土壌】</b> ■水質汚濁防止法 ■下水道法 ■土壌汚染対策法	廃水管理規則	廃水管理委員会 施設課	○
<b>【大気】</b> ■大気汚染防止法		施設課	○
<b>【騒音・振動・悪臭】</b> ■騒音規制法 ■振動規制法 ■悪臭防止法		施設課	○
<b>【廃棄物・リサイクル】</b> ■廃棄物の処理及び清掃に関する法律 ■PCB 特措法 ■各種リサイクル法		企画戦略課(危機管理) 財務課 施設課	○
<b>【危険物・化学物質】</b> ■消防法 ■毒物及び劇物取締法 ■労働安全衛生法 ■PRTR 法	毒物及び劇物管理規則	毒物及び劇物管理委員会 企画戦略課(危機管理)	○
<b>【放射性物質】</b> ■放射性同位元素等による放射線障害の 防止に関する法律	放射線障害予防規程 核燃料物質 計量管理規則	放射線等管理委員会	○
<b>【高圧ガス】</b> ■高圧ガス保安法	高圧ガス危害予防規則	高圧ガス危害予防委員会 企画戦略課(危機管理)	○
<b>【安全衛生】</b> ■労働基準法 ■労働安全衛生法	安全衛生管理規則 環境安全管理規則	安全衛生委員会 環境安全管理委員会 人事労務課	○

## (2) ステークホルダーへの対応状況

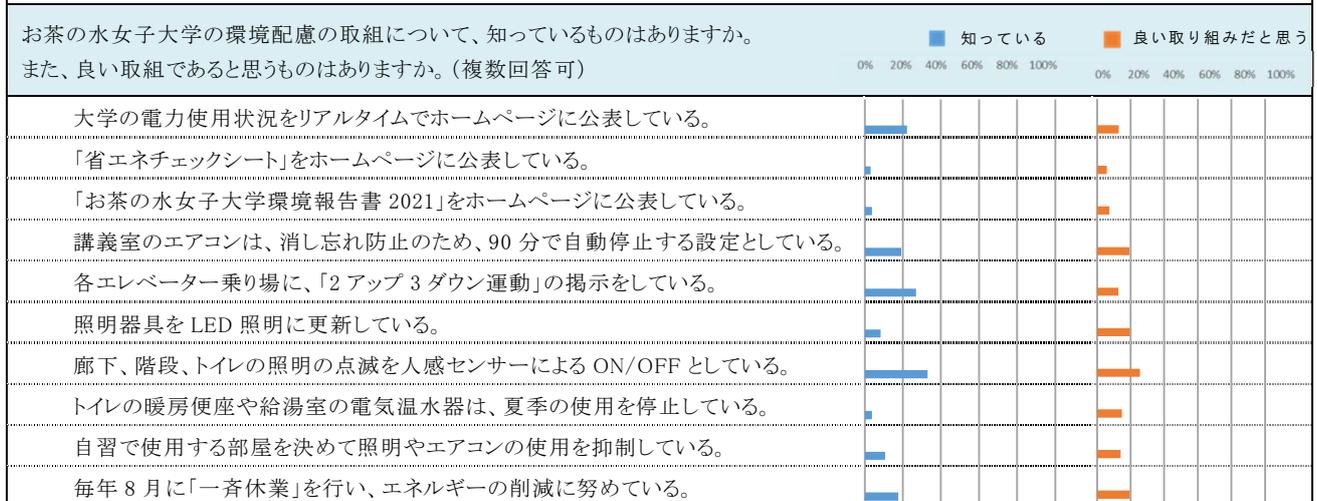
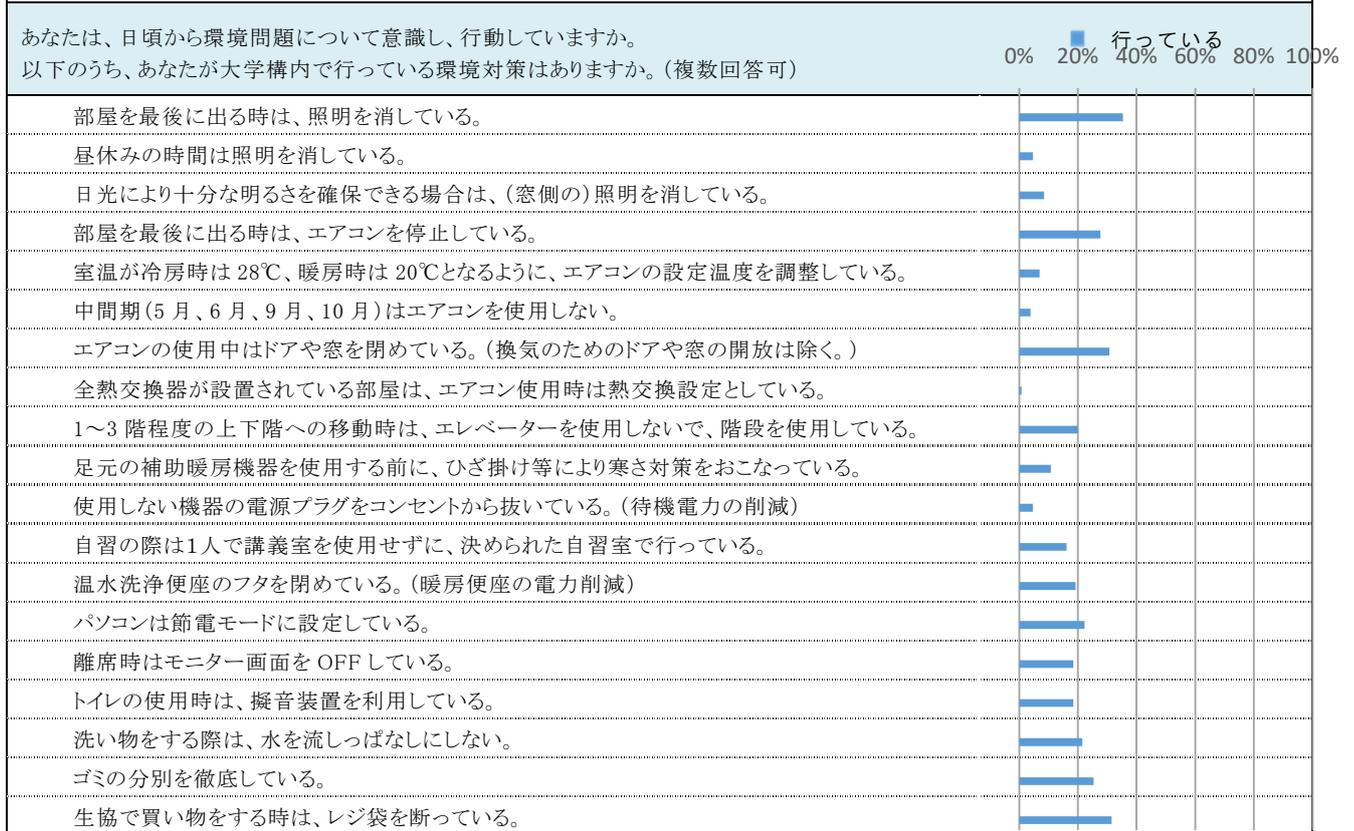
### 学生への環境アンケート調査

大学生・大学院生を対象とした環境アンケート調査を実施しました。



#### ■ 調査結果

質問事項	回答割合					
	0%	20%	40%	60%	80%	100%
環境問題は、私たちが取り組むべき喫緊の課題であると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
私たち一人一人の意識や行動により、環境問題は改善できると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
私たちは、日頃から、環境に配慮した取組(省エネ、ゴミの削減等)を行うべきであると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
環境問題に関心がありますか。 ①とても関心がある ②少し関心がある ③あまり関心がない ④全く関心がない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
家族や友人と環境問題について話すことがありますか。 ①よく話す ②たまに話す ③あまり話さない ④全く話さない	■	■	■	■	■	■
環境問題をテーマとした講義があれば受講したいと思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない ⑥既に「環境」に関する授業等を受講している、または受講したことがある	■	■	■	■	■	■
地域や大学の環境活動(ゴミ拾い等のボランティア等)があれば参加したいと思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない ⑥既に環境活動を行っている、または行ったことがある	■	■	■	■	■	■
SDGs(持続可能な開発目標)について知っていますか。 ①よく知っている ②少し知っている ③聞いたことがある ④全く知らない ⑤既にSDGsの活動を行っている、または行ったことがある	■	■	■	■	■	■
お茶の水女子大学は、省エネに取り組んでいると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
お茶の水女子大学は、節水に取り組んでいると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
お茶の水女子大学は、ゴミの削減に取り組んでいると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
お茶の水女子大学は、緑豊かで自然と共生できていると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■
お茶の水女子大学は、環境に関する講義が充実していると思いますか。 ①とてもそう思う ②少しそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない ⑤わからない	■	■	■	■	■	■



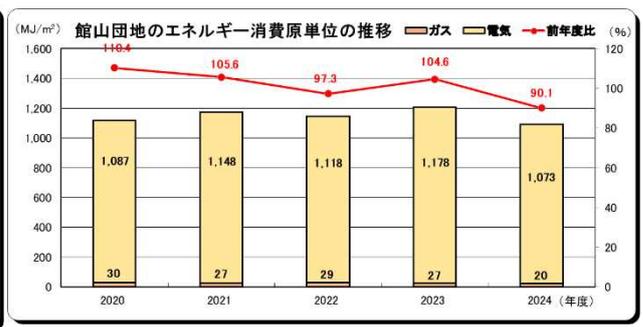
## (1) 環境負荷指標の算定基準

### ■ エネルギー消費原単位 (P.11)

※エネルギー消費原単位は、建物の床面積あたりのエネルギー消費量を示しており、 $[(\text{総エネルギー使用量}) / (\text{総延べ床面積})]$ で算定。

大塚1団地のエネルギー消費原単位は、大塚宿舎、いずみナーサリー、大学会館を対象外とする。

※大塚2団地、館山団地のエネルギー消費原単位は以下のとおりである。



### ■ 上水使用量原単位 (P.12)

※上水使用量原単位は、建物の床面積あたりの上水使用量を示しており、 $[(\text{上水使用量}) / (\text{総延べ床面積})]$ で算定。

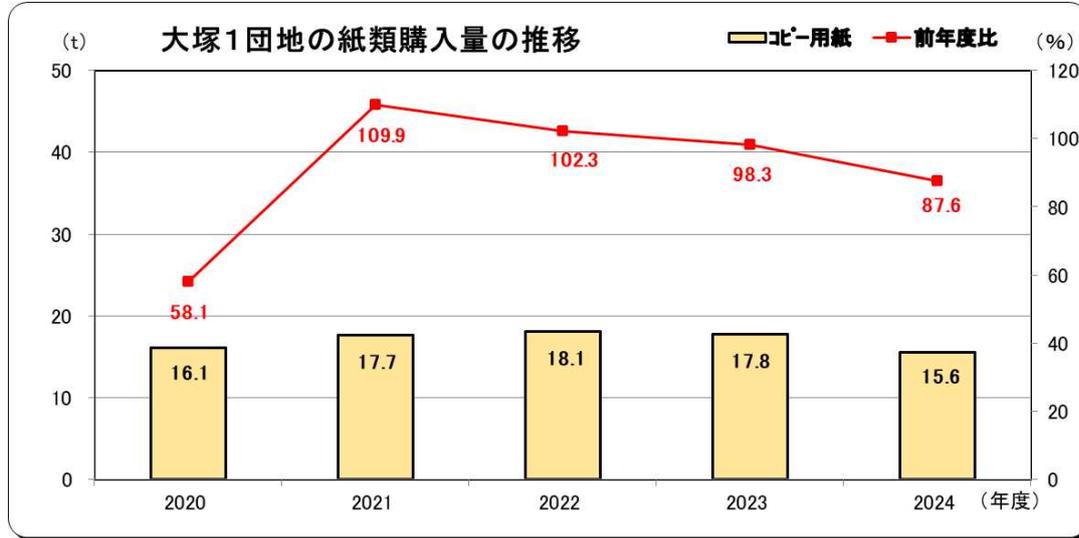
大塚1団地の上水使用量原単位は、大塚宿舎、いずみナーサリー、大学会館を対象外とする。

※大塚2団地、館山団地の上水使用量原単位は以下のとおりである。



■ 紙類購入量(P.12)

※紙類購入量の対象範囲は、大塚1団地とする。

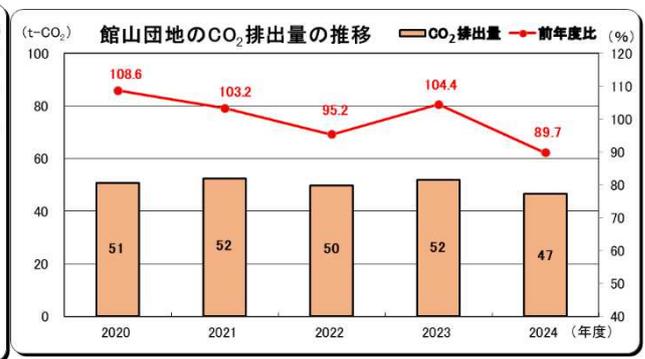
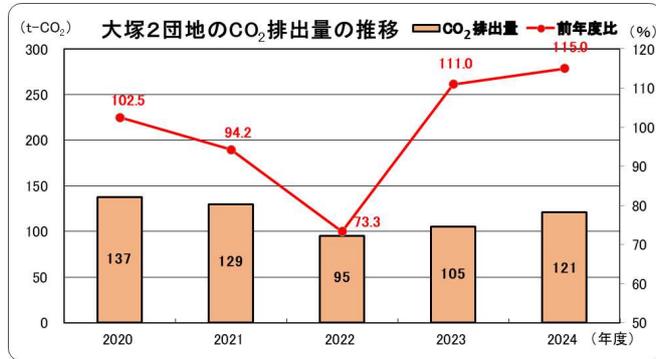


■ CO<sub>2</sub>排出量(P.13)

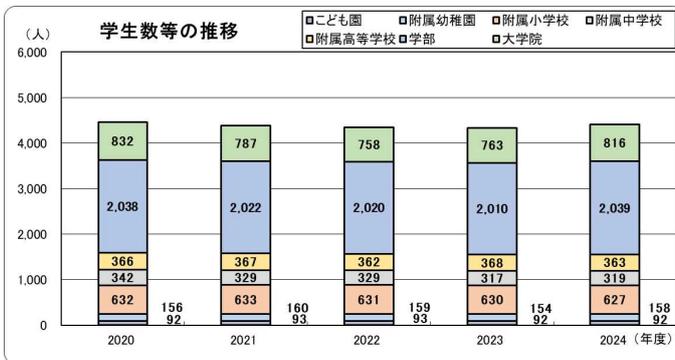
※CO<sub>2</sub>排出量は、電気使用量およびガス使用量より算定。

※大塚1団地のCO<sub>2</sub>排出量は、大塚宿舎、いずみナーサリー、大学会館を対象外とする。

※大塚2団地、館山団地のCO<sub>2</sub>排出量は以下のとおりである。

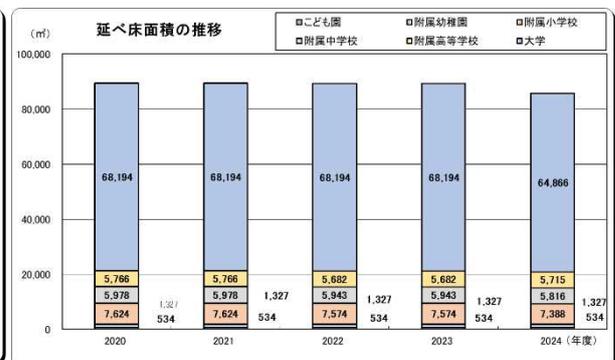


■ 学生数等の推移(大塚1団地)



※学生数等は、「国立大学法人等施設実態報告」による。

■ 延べ床面積の推移(大塚1団地)



※延べ床面積は、「国立大学法人等施設実態報告」による。

## お茶の水女子大学環境報告書 2025

発行年月：2025年12月

問合せ先：国立大学法人お茶の水女子大学施設課

TEL:03-5978-5136 FAX:03-5978-5892

E-mail:KC-sisetsu@cc.ocha.ac.jp